

私と同志社

奨励	川井 国孝〔かわい・くにたか〕
奨励者紹介	同志社国際中学校・高等学校校長 同志社国際中学校・高等学校数学科教諭

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである。互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である。」

(ヨハネによる福音書 15章16―17節)

自己紹介

最初に少し自己紹介をさせていただきます。私は皆さんと同じ同志社大学の出身です。今は理工学部になっていますが、当時は工学部でした。1973年度生で、電子工学科の出身です。皆さんはイメージできないと思いますが、当時京田辺キャンパスはなかったので、工学部も今出川でした。電気工学科、電子工学科の研究室は今出川校地の博達館にありました。

これも信じられないと思いますが、当時は大学の4年生になってから就職活動を始めました。私は当時から教員志望だったので、企業の就職活動は一切していませんでした。私の配属されたゼミには卒業を控えた20人ほどの学部生と2人の大学院生がいました。卒業を目前に控えた11月のはじめ、ちょうど今頃です。私を除いて全員就職が決まっていました。そうなることは分かっていたとは言え、さすがに不安な日々を過ごしました。はじめから私学の教員になりたいという希望だったのですが、私学の教員は非常に就職しにくい状況があります。それは、レベルが高いとか難しいとかそういうことではなく、その学校の教師が誰か退職しないと求人がないからです。しかも求人があったとしても募集が公表されるのが極めて遅いのです。私学の教員を募集する時に、学校は就職協定など、全く考えていませんから、企業の就職と二股かけることは、物理的に不可能でした。

さすがにその年の就職はあきらめていた11月末に、同志社が新しい高等学校を作る計画があるということで、教員の募集があり、運良く同志社国際高等学校の教員として内定をいただいたのです。卒業のまさに3カ月前のことでした。

後になって振り返ると、私の大学の卒業が1年早くても、遅くても、今の学校には就職できていなかったし、また企業の採用試験を受けていたらそちらに就職していたと思いますので、本当にラッキーとしか言いようがありませんでした。

同志社を卒業して

皆さんは、同志社大学の学生であることにどんなイメージをおもちですか。

第一志望で見事合格された方もおられるでしょうし、第一志望の他の大学に失敗して仕方なく入学された方もおられるかもしれません。同志社関係の高等学校から推薦で来られた方もおられると思います。皆さんさまざまな思いをもっておられることと思います。優越感であったり、あるいは劣等感だったり、それらが混ざったものだったりしているのではないかと想像します。そして、日々の大学での生活でも、不本意だったり苦労されていることも多いと思います。

今日読んでいただいた聖書の箇所、私自身が元気づけられる箇所の一つです。「私があなた方を選んだ」。

皆さん、何か大きな力に動かされている、そのようにお感じになったことはありませんか。私が同志社で学ぶことになったのも、同志社の学校に勤めることになったのも、本当に不思議な偶然以外の何でもありません。何か見えない大きな力に導かれていたかと思えないことでした。

私は仕事やプライベートでも、うまくいかずに困っている時、また、何かに苦労している時、この聖書の箇所を思い出します。自分の人生は自分で切り拓いているように思いがちですが、実は大きな力に動かされている、そう思うと少し気が楽になります。もし皆さんが何か共感できると思われたら、この聖書の言葉を覚えておいてください。

私は同志社大学の電子工学科から高校の数学の教員になりました。学校という職場はあまり一般的ではないかもしれませんが、校長という立場になると他の学校の先生方はもちろんですが、いろいろな業界の方、企業の方にもお会いする機会が増えます。寄付をお願いしたり、コンサルティングをお願いしたり、ということも多いです。

同志社大学の卒業生の方が社会でたくさん活躍しておられますので、私自身が同志社大学の出身であることで、良かったことはたくさんありますが、損をしたという経験はありません。

初対面の方と何か交渉しなければいけない時、はじめは緊張して気持ちを集中してしゃべりますが、お互いに同志社の出身であることが分かると、もうそれだけで親しみがアップし、話題も増え、交渉が進みます。表現は不適切かもしれませんが、同志社にかかわっていた人たちのもつ、総合的人間力の高さのレベルがある程度保証されているという安心感があるのだと思います。同志社ファミリーという言葉があります。いろいろな意味で使われていますが、この言葉も同志社にかかわる、あるいはかかわった人たちのそのような気持ちから生まれてきたのだらうと思います。

新島襄について

新島先生のことをお話する前に、私が勤務している同志社国際中学校・高等学校のことを少し紹介します。本校は、定員の3分の2が保護者の仕事の都合で海外に行き、海外での生活を経験してきた帰国生徒です。今では日本一帰国生徒数が多い学校です。そういうと何かかっこいい学校のように聞こえますが、本校はいろいろな文化を経験してきた本当に多様な生徒たちが集まっている学校です。前の学校で勉強してきた内容が一人ひとり違うので、一斉授業はできません。さらに日本語があまり得意でない生徒までいます。そこまでの状況になると、きれいな事ではなく現実の問題として一人ひとりに合った教育を提供しなければなりません。一人ひとりに対応すること、実はそれこそが教育の原点だったのです。本校の教職員は帰国生徒たちからそのことを学び、成長してきました。

1970年代後半、多くの日本企業の海外進出が始まって、帰国してくる生徒たちの教育問題に対応するために開校したのが同志社国際高等学校です。結果として私たちにとても多様な生徒の集団が与えられました。一人ひとりに対応しなければならない、たいへん手間のかかる学校でした。でも、1年ほどたった頃、私たちは、この子たち、ずっと日本で勉強していた生徒たちとは違うけど、すごく良いものを持っているよね。多様な生徒の集団もなかなか良いよね、と気づき始めたのです。

今、私たちの学校で最も大切にしているのは、一人ひとり違っていて当たり前、ということです。学校の教育理念のキャッチフレーズは「違い、という共通点からの出発」です。

なぜ、同志社国際のお話をしたかというと、今お話をした本校の教育理念が、新島先生の教育理念と全く同じだからです。

新島先生は今から140年ほど前に、人一人は大切だ、とおっしゃっています。また、傲慢不羈な書生を圧束せずともおっしゃっています。

今風に言うと、個性の尊重と多様性の受容です。日本の教育界で、グローバル化がブームになっているまさに今、注目されてきていることを新島先生は140年ほど前にすでに言っておられたのです。これは、まさに、驚きでしかありません。

私立学校は授業だけでなく、生徒募集活動も大切な仕事の一つなので、私もいろいろなところに行き学校の説明をします。その時に、日本の帰国生徒のさがけであった新島襄が作った同志社、本校はその同志社が作った帰国生徒受入専門校です。創立者新島襄の教育理念を今もしっかり守り続けています。にわかに帰国生徒教育を始めたような学校とは根本的に違います、と説明しています。

今と140年前では、学校を取り巻く環境が違います。学生、生徒のニーズも当然変化しています。にもかかわらず、新島先生の教育理念はまさに今求められていることなのです。その先見性は驚きでしかありません。教育の普遍的な原理なのだと思います。新島先生のおかげで私たちは、ぶれない教育理念をしっかりと守って教育に専念できています。

最後に

私たちは学生であったり、教職員であったり、また卒業生として同志社にかかわっています。努力が実って同志社にいる人もいれば、仕方なく同志社にいる人もおられるでしょう。どんな形であれ同志社にかかわる私たちは、この季節には新島先生のことを思い出して、自分を振り返る時をもちたいと思います。これからお話しすることは、私の個人的な解釈であることを最初にお断りしておきます。

江戸末期、アメリカに渡り、どこかの誰かも分からないアジアから来た英語も話せない新島先生は、自分に本当に親切にしてくれるたくさんの人たちと接し、この人たちはなぜこんなに親切なのだろう、それはニューイングランドのプロテスタントのキリスト教の信仰によるものに違いないと確信されたのです。そして、これからの日本のために、この人たちのような良い人をたくさん増やすことが必要だ、と考えられて、日本にキリスト教主義の学校、同志社を作られたのです。

日本ではキリスト教の信仰をもっている人は、割合として多くありません。実は私もクリスチャンではありません。私は自分をキリスト教シンパサイザーだと思っています。キリスト教の信仰をもっていない人は、関係ないのか、ということではありません。同志社にかかわる方は、クリスチャンでなくても、キリスト教シンパサイザーであってほしいと思います。新島先生が学生にどのように接しておられたか、新島先生がどのような人物を育てようと考えておられたか、多くの皆さんは勉強して知っておられると思います。

良い心をもった人を育てるために立てられた同志社にかかわる私たちは、知識や技術を習得するだけでなく、良い心もしっかり育てていきたいものです。そして私たち一人ひとりに与えられている力を、社会のために少しでも役に立てることができれば、同志社にかかわるものとして創立者の願いに応えることになるのだと思います。

